

1 亜高山地帯の造林

1 試験担当者

本場造林部造林科長：草下正夫

“ “ 造林第二研究室：蜂屋欣二，只木良也，棚秋一延

“ “ 植生研究室：前田禎三，刈住 昇

“ 土壌調査部土壌第三研究室：宮川 清

“ 防災部気象研究室：岡上正夫，佐々木長儀

東北支場育林第二研究室：加藤亮助

“ 育林第三研究室：山谷孝一

“ 経営第四研究室：小島忠三郎

木曾分場造林研究室：飯塚三男

2 試験目的

拡大造林の進展にともない亜高山地帯にも，大面積皆伐人工植栽の施業がすすめられているが，その成績は必ずしも満足すべきものではない。しかも昨今の労働力の不足の問題もからんで，これら地帯における造林技術の再検討と一層の研究が必要となってきた。この研究においては，人工造林あるいは天然更新にかぎることなく，それぞれの環境に応じた最適更新技術の確立を目的とする。

3 昭和43年度の経過とえられた結果

前年度（亜高山地帯の造林，中間報告，昭和42年3月参照）に引続き，次の各項について研究をすすめた。

- (1) 八ヶ岳帯状伐採地区の保残帯処理後における稚樹の消長および植生遷移

（本場担当）

- (2) 川上帯状更新試験地の帯状伐採実行後の稚樹の消長および植生遷移

（本場担当）

- (3) シラベ単純林の生産構造（根系調査をふくむ）および生長予測

（本場担当）

- (4) ブナ更新試験地（六日町署管内苗場国有林）について稚樹および植生の消長調査

（本場担当）

- (5) ブナ人工植栽林（新潟県下）において地上，地下部の物質生産の解析

(本場担当)

(6) 高山性樹種の樹種更改

(木曾分場担当)

(7) 東北地方の亜高山林およびブナ帯上部に関する調査

(東北支場担当)

1. 亜高山帯の針葉樹林については、稚樹がどのような経過で消失するか明らかになり、有効的な更新方法を施業的に実施するメドがついた。

ブナの物質生産の解明がすすみ、対象ブナ人工林が同地方スギ林の3等地に相当する成長をしていることが明らかになり、ブナの人工植栽の可能性をひらく一つの端緒をつくった。

尾根筋の風衝地に植栽されたウラジロモミは、風害のため樹の片側が枯枝となるものがあり、カラマツは1,700m以上の地帯で野兎と思われる被害が相当みられ、シラベ壮令林は隣接のカラマツに比し、樹高、胸高、直径、材積ともに良好であった。

東北地方のブナ林は腐植の多い湿性ポドソルを主とし、チシマザサの発生、生育はきわめて旺盛で、伐採跡地におけるブナ稚樹はきわめて少ない。保残木作業区で17年を経過した更新状況はブナが優占種となり上層林冠を構成し、安定した状態である。

現地気温の傾向を把握し、また林内、緑の照度と稚樹発生状況との関係をしらべた。

また、東京、名古屋、前橋、長野の四局と、六日町署管内苗場山試験地において、現地協議会をもった。

4 昭和44年度の試験計画

前年度の調査にもとづいて本年度は更に次の各項について調査研究をすすめる。

- (1) 八ヶ岳帯伏伐採地区の保残帯および当初更新帯の稚幼樹の経年消長調査

本場(植生、土壌3)

- (2) 川上帯伏更新試験地の稚幼樹の経年消長調査

本場(植生、土壌3)

- (3) ウラジロモミ、シラベの生産構造

本場(造2、植生)

- (4) ブナ更新試験地の基礎調査および稚幼樹の経年消長調査

本場(植生、土壌3、気象)

前橋局(六日町署)

- (5) 亜高山性針葉樹林の笹処理試験

木曾分場

- (6) 東北地方のブナ更新試験地の継続調査

東北支場(育林2、3)